

『京都市の赤痢発生に関する衛生学的観察』

京都府衛生課 [編]

京都府 [刊] 1930年3月 26cm / 148頁 図書番号 OD-0075

本書刊行当時、京都市では「年々千人以上」の赤痢患者が発生し、発生率は「六大都市（東京、大阪、神戸、名古屋、京都、横浜）中斷然として高い」状況であった。本書は、京都府衛生課が「京都市の赤痢の発生を衛生学上の諸方面より観察検討」したもので、赤痢発生の「真因を探求し後日の為に備うる」ことを目的としている。

「第一 概説」では、1918（大正7）年から1927（昭和2）年までの統計を基に、六大都市における法定伝染病患者の発生率とその中に占める赤痢患者の割合を検証している。それによれば、京都市は「人口千に対する法定伝染病患者発生率」が4.8人で、この値は六大都市中第1位である。同じく、法定伝染病患者100人に占める赤痢患者数も、京都市は37.7人で六大都市中最多である。この結果に対し本書は、「京都市の伝染病患者が如何に多数なるか、殊に赤痢患者が如何に多きやを知る」と述べている。

「第二 発生要項」では都市の位置、気候、地質、人口密度、上下水道、屎尿・塵芥処分について京都市と他の五大都市を比較分析している。まず都市の位置に関して、京都市のみが「東北西の三面を山を以て囲まれたる盆地」であり、気候は「気温の変動最も著しく、湿度最も高く（中略）故に京都市の気象は六大都市中最も不良」としている。地質は、五大都市が「粘土層を含み比較的厚層」なのに対し、京都市は「主なるものが砂礫層」である。このため、「水の浸透甚だ容易」で「汚水は容易に下部に向かって浸透する」のが「他の都市と異なる点」とする。人口密度は、1927年の統計によれば京都市は六大都市中第3位で「最低にあらざるも最高にあらず」となっている。さらに、1927年時点の上水道普及率を見ると、京都市は80%を超えて六大都市中第4位であるが、市内には7万近い数の井戸も存在する。これらの井戸は「水の浸透極めて容易」な地質のため「水質が極めて不良」であり、「飲用することは甚だ危険」と警告している。上水道に対し下水道は、完成率が1%に満たず六大都市中最下位である。なお、京都府による検査で「京都市内の河川の水質は化学的にも細菌学的にも甚だしく汚染」されている事が分かっており、本書は「下水道の不備が其の一大原因」と指摘している。屎尿・塵芥の処分方法は各都市に大差なく、屎尿は一部が浄化処分される以外は肥料として利用され、塵芥は焼却、埋め立て等で処分されている。

「第三 予防要項」では、医師の分布等について述べる。1926年における六大都市の「医師一人に対する人口」を見ると、東京市の534人に次いで京都市が584人であり、「京都市は六大都市中東京に次ぎて医師の多き都市」とされている。

最後の「結論」では、京都市の高い赤痢発生率の原因を考察する。これまでの調査から、他の五大都市と比較して京都市は「下水道完成率著しく低し」「地質は砂礫層より成り浸透性に富む、従て井水は汚染され易し」「湿度高く、気温の変動特に著し、故に健康を障害し易し」と判明した。本書は「是等の諸因」が「病原の散逸を来たし、人体内侵入の機会を滋くし、若しくは誘発に対し影響する」ことで「本病の多発を招来せしものならん」と結論付けている。

（井上学・市政専門図書館司書）